

SF 的読み解き

子どもという風景

## 第三十六回

### 桃太郎の背中より

堀内 守

背中

「背中」は、もちろん「せなか」と訓みます。「もちろん」とは、たぶんオトナが共有している了解事項をアテにしているからこそいえることで、時により、その了解が少しゆらぎはじめることもあります。

「背」だけで意味が通ずる。それなのに、なぜわざわざ「中」をつけるのか。この辺がオトナの了解事項を少しずつゆるがす理由です。いかにも平凡、いかにも閑人の問い、のように見えますから、オトナたちは、「そんなことにかまっちゃいられないよ」とばかりに、この問いを無視してしまうのでしょう。

忙しい時代です。だからそういうオトナたちの気持もわからないではありませんが、時にはちよっと立ちどまって、「背中」と「背」をくらべっこしてもいいじゃありませんか。

いえ、むしろ話は少し副産物をプレゼントとして送ってくれるかもしれません。たとえば、はじめっからオトナとコドモの区別はあるわけではないので、右のような問

いをあつさりとは無視できるのが「オトナ」なのであります。大人であっても、そのような問いを無視しない者もいます。そういう人は、ここにいう「オトナ」とは少し違います。少しどころか大いに違う。

あ、あなたも無視して行ってしまわれるのですか。やっぱり、あなたも「オトナ」でいらっしゃる。ほめて申しあげているのですから、どうぞお怒りにならないように。

それにしても、みごとに「背中」をしておいでですね。美しい。たくましい。やさしみもある。

### 背中を

遠ざかって行く「オトナ」の背中は、単なる「背中」ではありませんね。何となく、何かを訴えはじめるではありませんか。それも、二通りの文脈で。

ひとつは、「背中」が「背中以外のもの」を示しはじめるということです。

「背を見せるか」となれば、不敵さのあらわれ。「背を

見せる」は、時には裏切りをも示します。何と、「背〇〇」の意味のものすごいこと。背反、背任、背逆、背信、背約、背教、背違、背盟、背徳、その他もろもろ。まったく「そむく」「うらぎる」「みすてる」等のマイナスのイメージに満ちあふれています。中性的なのはわずか「背骨」とか「背景」ぐらいなものでしょう。

ハイ。「背」は「ハイ」とも訓むのですね。「せ」とも、「せい」とも訓みます。ハイ。セイセイこれとおつき合ってください。

面白いのは「せ」と「せい」ではイミが異なってくることですね。「せ」は「背中」でした。ところが「せい」ともなると、これは身の丈たはを示すのですね。ご存知でしょう。あの「柱のきずはおとしの、五月五日のせい、くらべ……」の歌詞を。あれを「せくらべ」としたら調子が合いませんよ。やっぱり「せい」でなくちゃ。そうですね。樋口一葉の作品だって『せい、くらべ』でしょう。『せくらべ』ではありません。

「せい」となることで——どうです。こんなに異なっ

た風景が見えてくるではありませんか。え、少しは関心をおもちになった？

なら、あなたは「オトナ」から抜け出しはじめたわけですか。

あなたの「背」も、異なった意味を発信しはじめます。それが第二の文脈で。

あの万葉の歌にもあるじゃないですか。「わが背」と呼びかけているあれですよ。「背の君」「いも背」とある、あの「背」。

何と「背」は、いとしさのシンボルなのです。

背に

さて、そこでご想像ください。

「わが背」となぜ呼んだのか。どれくらいの距離になると、「わが背」と呼べるのでしょうか。びったりとくっついていて、ささやくように「わが背」と呼びかけるか。

まあ、そういうことはないでしょうね。なぜかという

と、その状態ならば、名前を呼び合わなくともよいからです。だから、「わが背」と呼ぶには、距離ができていなくてはならない。その「距離」は単なる物理的な距離ではありませんね。心理的？ それだといかにも現代風です。どうしても、それを表現するにふさわしいことが必要です。たぶん「神話的」がびったりでしょう。そう、そう、「神話的距離」ですか。

相手は遠ざかっていく。しかし、呼び返したい。遠ざかるのと、近づきたいのと。この相克のなかから生まれるのが「背」に向かって呼びかけることでしょうね。「わが背」とは、「自分の（身体の）背」ではない。あなたへと去っていくあなたを「わがもの」としてつなぎとめる叫びですね。

あなたもおわかりのように、相手を「あなた」と呼ぶのは、もともとあなたに去っていく人を「わが背」としてひきとめるところから生じたのではないのでしょうか。

ご存知の映画にもありました。『シェーン』です。去

って行くガンマンに向かい、少年が呼びかける。「シーン、カム、バック！」。そのエコーが何回もダブる。

あ、あなたもあのシーンをおぼえておられます？　なら話は直観的にわかりますな。

背中より

「せなか」「せい」「せ」——と、こう三つを並べてみます。このうち、あなたの語彙のなかにはどれがいちばん早く入ってきたとお思いですか？

それに「せな」をつけ加えてもかまいません。

あ、そうせっかちに「背を向け」てはいけません。せいぜい落ちついて、あれこれと思いのほどをたぐり寄せていただかないと。

いちばん短かいから、「せ」が先だろうとおっしゃる。なるほど。そう考えるのも一理あり、ですね。でも、その一理はどうも「オトナ」のそれですね。そんなに簡明に、経済的に、効率的に行きはしないのが人間のドラマの楽しいところでしてね。

こういうときには身近なところで通訳を求める必要があります。通弁、通辞、翻訳。

あなたは「手」や「目」を幼なときどんな表現で呼んでいたとお思いですか。「て」あるいは「め」と短かく呼んでいたのでしょうか。「てて」「めめ」「おてて」「おめめ」でしょう。

短かい方がよいという常識に反し、「おてて」や「おめめ」なのです。

いいですか。ここに長さを読みとっては何にもなりません。むしろ、「て」や「め」よりも、「おてて」や「おめめ」の方が身体のリズムに合う——このことを読みとるべきなのです。何ならやってみるとよくなります。

「め」と「おめめ」。「て」と「おてて」。

そうですね。おわかりでしょう。「め」や「て」という音よりも、「おめめ」や「おてて」の音の方がリズムカルです。

そこで、話を戻しましょう。いかがですか。

「せなか」「せい」「せ」のうち、いちばんはやくあな

たの語彙に入ってきたのは「せなか」のほうです。次が「せい」でしょう。それも「せい」と発音するよりも「せえ」の方に近かった。「せ」はずっとあとになって、漢字を習得してからのほうです。

### 背中で

あなたは「背中で」眠った。おんぶしてもらったはずですね。「だっこ」は短かい距離と短かい時間。「おんぶ」は長い時間と長い距離。これが人類共通の生活時間です。

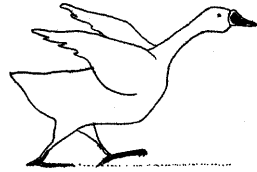
したがって、あなたは、自分の背中に気づく前に、まわりの人びとの背中を見て、人びとを分類することを学んだはずで、この人の背中は「親しい」。この人の背中は「よそよそしい」。こちらの背中は……というように。その結果、「背中」は、父の、母の、青年の、老人の……というように分類され、さらに若い、老いた、疲れた、元気いっぱい……というように、意味をもつものとなっていきました。

まわりの人を「おうま」にして、あなたはその背中にまたがった。「おうまになってやるよ」とか「さあ、おんぶしてやるよ」というときの大人たちは、忙しい「オトナ」とは違っていたはずですね。この場合の「背を向ける」は、あの一連の「背……」のマイナス・イメージとは大違いでした。それは、受容、好意のあかしだったからです。背を向けてくれた人とあなたは、そこでたがい受容し合い、好意を分かち合った。この分かち合いが「背中」で読みとれたのでした。

### 記号としての背

「背中」から「背」に移るには、文字を習得する必要がありました。人間の身体をモデルにし、山の背だとか、波の背だとかの比喩を知り、また「そむく」に続く一連の熟語を手に入れるには長い道程を歩まなければなりません。きないことです。

でも、その途中にいろいろな中間的な「背」が用意されていきました。



何よりも重い意味をもって入ってきたのが「背負う」という行動でした。「背負い投げ」「背負い太刀」という特殊なものよりも、「背負う」という、労働の代表のごとき運命が待ちかまえていました。

「せおう」が「しょう」に縮まるのもよくわかります。人類はいろいろなものを「背負って」生きてきました。いまでも「背負って」います。荷である場合もある。運命である場合もある。

あ、お疲れですか。では、背もたれをどうぞ。背筋をそう伸ばして聴いておられたからお疲れになったのですね。どうぞ、リラックスしてください。椅子の背もた

れ、柱に背をもたせるのも一工夫ですから。

背筋をピンと張る、と申しますね。「気をつけ！」の姿勢です。背筋を伸ばすとは、正座のあかしでしょう。背をまげれば、老いた人の姿のあかし。あ、ネコが背を曲げた。よく曲がるものですね。人間は、あいうまくは曲がらない。

背中では思い出しましたが、絵本などでは背の意味するところをちゃんと描き分けていますね。わかり易くするために、桃太郎の絵本でもち出しませうか。

まず、おじいさんとおばあさん。ちゃんと背中を描き分けていますね。おじいさんの方は背中が広く、かつ角

ばっている。おばあさんの方が背中は小さく、かつ丸味を帯びている。生まれたばかりの桃太郎は、全体が丸味を帯び、背中はふっくら。おじいさんとおばあさんの背  
中が薄いのと好対照です。

やがて、桃太郎が鬼が島へ行こうと決心する。とたんに桃太郎の背中はぐーんと変わってしまいます。背筋はまっすぐになる。これに対し、おじいさんとおばあさんは、きびだんごをつくっています。まるで服従しているかのように背筋に張りがなくなります。明らかに、推定される年齢以上に背が丸く描かれます。そうしないと、桃太郎が引き立たない。

桃太郎は、晴れの装束で身をかためています。鉢巻をし、背中には「桃」の紋所までつけている。太刀をはき、目は遠方を見つめています。

老夫婦の方は普段着です。そして、極端に背を丸めて描かれている。だんごを丸める作業をしているから必然的にそうならざるをえない、と判断しないでください。そうではないのです。

これは、養父母と子というヨコの関係のなかに、あらたに支配と従属というタテの関係をもち込んだからです。イヌ、サル、キジの絵は、その延長上にあります。

絵としては鬼の絵が象徴的です。鬼は「背中」から描かれています。正面から堂々と描かれていませんね。いくつかの絵本を比較してみても、そういうふうになっています。

第一は「背中を見せて」逃げる姿として。

第二は、桃太郎に降参した場合で、服従の姿勢として。

鬼の背中は、なかなか頑丈そうで、筋肉も隆々として  
います。みるからに強そうです。それが背筋を伸ばして描かれたら、鬼の敗北は描けません。そこで、背中を曲げた形で描くのです。

これに対し、桃太郎は、床机しょうぎに腰をかけ、背を伸ばし、視線は鬼を見おろす形になっています。赤い頬は、鬼の鈍い皮膚の色と対照的です。

背中からのメッセージ

桃太郎の背中のみんちあたりに、紋が描かれてい  
ます。桃の形です。桃太郎だから桃。これは実に単純な連  
想です。ふつうの紋章には、こんな単純なものはないの  
では。もつと抽象化したり、もつとデフォルメしたりし  
て紋にするのではないでしょうか。

生まれたときの桃太郎は丸々しています。髪の毛が生  
え揃っていますから、ふつうの人間の子どもとは違った  
状態で生まれたことを物語っています。ところが、鬼退  
治に出かけるまでに——その髪型から判断して——まだ  
成人していない。十五歳以前だということになりそうで  
す。

絵本からはどのような歩き方をしたのか見当はつきま  
せんが、あれだけの装束をつけますと、かなりぎごちな  
い歩き方になったのかもしれないと推定できます。ある  
いは、初めて正装をしたので得意になって歩いたのかも  
しれません。

ともあれ、「背中」からのメッセージを読みとろうと

する私たちの観点からすると、どうもよくわからないの  
が、鬼が島からの凱旋の光景です。

第一。おじいさんとおばあさんは、顔はにこやかに、  
背中は丸めて、手は歓迎し、というぐあいにアン balan  
スになっています。歓喜の表現は、元来アンバランスを  
特性とするのですが、それにしても、兩人の「背中」は  
家来のそれに近い姿勢といわねばなりません。

御主君さまのお帰りだ、という感じ。

第二。桃太郎は、威風堂々の帰還というよりは、扇を  
もって応援の姿勢になってしまっています。ぶん取った  
宝物を積んだ車を引くきじと犬とさるを応援するのでし  
ょうか。

桃太郎の背中は、応援団長の背中に変わっています。凱  
旋將軍の姿というよりも、宴うたげで踊る道化役の背中に近く  
ありませんか。

第三。きじ、犬、さる、の三匹の背中は実に不自然に  
なります。だって、きじは首に綱をかけて、車を引っぱ  
る役割ですから。犬は、前足で車の柄をもちあげ、口を



あけて苦しげです。さるは車を背後から押しています。

この背中も、車を押している姿というよりも、車にうしろから取りついている姿のように見えます。

三匹とも、こんな車を引くのはいやだと悲鳴をあげているように思えるのです。

### 背中之歌

さて、「背」や「背中」をうたった歌はどんなパターンにまとめられるでしょうか。

第一は子守唄です。

子を眠りに誘う歌は、直接「背中」をうたっているいませんが、明らかに「背中」の子に呼びかけています。親しみのある「背中」が浮かぶのです。泣く子をおどしたり、なだめたりする歌もあります。この場合は「背中」がゆすられています。また子守のつらさをうたった歌は「背負う」ことのつらさをうたっています。

第二は、苦汁の労働をうたっているものです。背中は曲がっています。

第三は、人間関係を背負っている背中。さまざまなしがらみが背中で合流し、絡み合い、「背に腹はかえられぬ」という諺のすさまじい一面をかいま見せてくれます。

「背中」の歌がいちばん多いのは何といってもCMなのです。広告、ポスター、それにテレビのCMの映像。これらに登場する「背中」は、演技としてはぎごちないのがほとんどですが、かわいらしさ、こっけいさ、おかしみ、わびしさなどの混合したふしぎなトーンを示します。何なら、意図的にお調べいただいてもかまいません。

背中は演技しようとしてもなかなかうまく応じてくれません。オーケストラを指揮する指揮者は、客に背中を見せ続けます。それは具体的に目に入ってきます。しかし、同じ背中であっても、もっと抽象的な背中もあります。子は親の背を見て生きる。そういうときの「背中」あるいは「背」は、生きることの凝縮した、意味発信の場です。

幼児の背中はどうでしょう。この小さな、丸味のある背中は、目をかけてやり、声をかけてやらないと意味が拡散する奇妙な舞台です。

さあ、もうお話したいことはほとんど尽きかけました。あなたはお出かけになりますか。

そうそう。そうして歩いていかれるあなたの背中には、あなたのごきげんのいいことを示していますよ。ビデオにでも撮っておきましょうか。そして、あとで何回も映してみるのです。すると、あなたの背中は、きつと粹いさに見えたり、悲しみを秘めているように見えたり、最初に見たときよりも異なった意味を示しはじめるでしょう。そういう再発見のよろこびもあるのです。

ああ、あの人のうしろ姿がいつのまにか子どもものうしろ姿のように見えてきた。人それぞれ、いろいろなものごとを背に負っている。

(名古屋大学)

